

# 『日本ータウトの日記』

1935 年（昭和 10 年）、1936 年（昭和 11 年）

## 日向別邸に関する記述の抜粋

旧日向別邸保存活用計画・熱海市より

旧日向別邸 と タウトの在日																																											
和暦	昭和8年			昭和9年			昭和10年			昭和11年																																	
西暦	1933			1934			1935			1936																																	
月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10													
日向別邸工事																																											
一期工事				土地取得					上屋設計・工事 10ヶ月																																		
二期工事																																											
三期工事																																											
タウト在日	3日タウト来日																																										

7/13

上多賀借屋期間

9/9

## 1935年（昭和10年）

4月5日（金）東京－国際文化振興會－日向利兵衛氏－大倉邸の設計

### 日向利兵衛氏と出会う

・同氏はまた、秘書の近藤氏を通じて私に來訪を求め、私を日向（利兵衛）氏に引合わせてくれた。日向氏はもう六十歳を超えた老紳士で現在は自適の境涯にあり、また日本のアマルフィともいうべき熱海に別荘をもっている。同氏は、この別荘を増築するについて、その設計を私に依頼したいから、そのお含みで一週間ばかり熱海にご滞在願いたいというのである。

4月16日（火）東京－熱海・日向氏別荘－熱海の風景

### 日向別邸を訪れる

・日向氏に誘われて、熱海にある同市の別荘に赴き、とりわけ婦人から手篤いもてなしを受けた。この老夫妻は廣濶な海上の眺めを恣にする新邸で安穩な餘生を送っている

### 日向別邸の建築（上屋）について

・建物はなかなか趣があり、大體においてよくできている。設計はすべて日向氏の方針に従ったものらしい。温泉の湯を引いて暖房にするような新工夫もあった。（温泉は三百米の深所から湧出している）。間取りの工合もよく考慮してあり、施工も上乘である。何もかもというわけにはいかないが、日向氏と私とは趣味の點で非常によく一致するところがあるので、今度の増築計畫は順調に運びそうな気がする。

### 日向別邸地下室の希望を聞く

・現在の日向邸は、海に面した斜崖にコンクリート構造の張出しを設け、その上部を庭園にしている。この庭園の下を地下室にしてここに居間と社交室とを建築したいというのが日向氏の希望である。（日向氏は、『ミラテス』で電氣スタンドを買ってから私の仕事に興味を持ち私に會いたがっていた）。

### 日向別邸の客間について

・透明な湯を始終一杯に湛えた大浴室では、いつでも勝手に入浴できる。私達に當てられた縁側附の客間は、明るく立派なつくりの日本座敷である。（この頃では、寝臺より畳の上に寝る方がよくなった。）海氣を十分に呼吸した所爲か、咯痰を伴う氣管支カタルは非常に輕快になり、充血した眼も大分よくなった。

### 日向別邸からの眺望について

・海上には初島が浮かんでいる、この島には三十戸ばかりの民家があり、漁獲高を各戸で等分するという小規模の共産制を実施している。・水平線の上には大島が横たわり、噴煙を吐く三原山が空をくっきり限っている。

4月17日（水）熱海－沼津－静浦－江の浦－長岡－三津－修喜寺－伊東－熱海

日向氏とともに伊豆半島上部へ・日向氏の案内で伊豆半島の上を一巡した。

### 日向別邸の上段の間について

・日向邸には、夫人夫妻は一段と高い畳敷きの座に坐り、私達は椅子にかけて相對する

という一風變った趣向の部屋がある。

#### 日向氏の新築地下室の要望

・日向氏が私に望んでいるのものは、夏になっても山へ行く必要のない『夏向き』の部屋である、つまり涼しくて落ち着いていてしかも『味』のある建築なのだ。

#### 日向別邸地下室の初期構想スケッチと協力者について

・最初のスケッチはもうできている。日向氏はこの構想に満足してくれるだろうか。今度の仕事なら、建築家は当時のメッセルのような、権威もある地位を保つことができると思う。だが協力者を求めるにしても、上野君は腰が重いし、ほかの人達は、或は『ハイカラ』すぎたり、或は單なる模倣者であったり、或はまた弱すぎたりするのだ。

#### **4月19日(金) 熱海－東京**

##### 熱海から帰京・熱海から歸京。

23日 四月二十三日(火) 少林山・洗心亭－東京－日向氏－箏曲演奏會－日本音楽の特質  
描いた構想スケッチを日向氏から承認

・日向氏を訪ね、同邸の全體的な構想を描いたスケッチを示して、その承認を得た、早速仕事に取りかかることになろう。

#### **5月1日(水) 少林山・洗心亭－東京－吉田鐵郎氏－『ミテラス』－國寶重要美術展覽會 吉田鐵郎氏に会う**

##### 日向別邸地下室の設計料について

・上京。吉田氏に会う。同氏は、今月中旬から私が上野君と裏日本を旅行してる間に、日向邸の細部の圖面を、自分が監督しながら数名に若い建築家に描かせようと言ってくれる、親切なことだ。日向氏は、私の設計料を日本の謝禮規定に従って支拂い、『多分』それにいくらか色をつける積りらしい。これには疑義が無いでもないが、今更それを持出したところでどうしようもないことだ。

設計の疑点に対する提案が日向氏から承認される ・日向氏は、設計の疑點に關する私の解決を諒承してくれた。

#### **5月5日(日) 少林山・洗心亭－小堀遠州の忌日-禪－淺間山の爆發－村芝居**

##### 日向氏と禪

・日向氏は、毎朝一時間ずつ座禪するそうだ。  
・日向氏は座禪はどんな體操よりも食欲を増進すると言っている。同氏は家の中に宗教臭いものを一つも置いてない、稀らしいことだ(日向氏は61歳である)。

#### **5月7日(火) 少林山・洗心亭－花時－日本の統治形式について－天皇－建築家の仕事 抱えている仕事と収入について**

・このところ三日ばかりは、朝から晩まで日向邸の圖面(二十分の一のものと現寸のもの)にかかりきりであった、また 若い協力者達に私の意のあるところを正しく理解してもらふ爲に、別に數枚のスケッチを描いた。そのうえ高崎の工場に渡す圖面の修正、

材料の選擇、色彩の問題の解決、仕事の監督などもあるので、ひどく忙しい。だからベルリンにいた時より二倍も三倍も仕事が殖えているが、収入は精々當時の三分の一である。

#### 図面を描いて感じたこと

・ 圖面を描いていながら、直線をそのあるべき位置に正しく引くこともまた藝術であることを覺った。釣合の美しい調和を求めたり、定型に囚われずに、法則を自在に驅使してのびやかな形を創ったりすることは、實に大變な仕事だ。私はいま小堀遠州を實地に學んでいる、それも特に細部について學ぶところが多い。

### **5月8日(水) 少林山・洗心亭-東京-吉田鐵郎氏-大倉和親氏**

#### 吉田邸へ訪問

・ 日向邸の圖面を持って吉田氏のお宅を訪ねた、奥さんや息子さんのもお會いした。

#### 吉田鐵郎氏のもとの若い協力者について

・ 吉田氏が豫め打合せておいてくれた五人の建築家が来た、そのうちの二人がこの前の日曜日に熱海に行って、日向邸の建築現場を正確に測量してくれたのである。この若い建築家達が、今度の仕事の協力者で、主として建築圖面を描いてくれることになっている。私はこの人達を信頼してよさそうだ。

吉田鐵郎氏について ・ 吉田氏とは、話が實によく通じる、京都の上野君とまったく同様である。

### **6月10日(月) 東京-日向邸-大倉邸の設計**

#### 日向氏の東京の本邸を訪れる。大工の佐々木嘉平氏に会う

・ 日向氏が東京の本邸を見せてくれた、なかなか氣持のよい造りである。吉田(鐵郎)氏の紹介で大工の佐々木氏が熱海の日向邸の増築を請負うことになったので、同氏にも會っていろいろ話合った。また吉田氏の指導下に、三人の若い建築家がこの増築部分の圖面を描いているので、同氏はたびたび會合している。

#### 夏用に上多賀に家を借りる

・ 日向氏は、私達をひと夏、海邊で過ごさせようというので、熱海近くの漁村に小家屋を借りてくれた

### **6月20日(木) 少林山・洗心亭-東京-吉田鐵郎氏-日本の建築家**

#### 吉田鐵郎氏の事務所に行く

・ 吉田(鐵郎)氏のところでは、若い建築家達が相變らず日向邸の圖面を描いている、佐々木氏も居合せて、建築費の見積りをしていた。

### **7月3日(水) 東京-日向利兵衛氏-建築の仕事-少林山・洗心亭**

#### 日向氏に会う

・ 七月一日に上京した。今日は日向氏に會う。熱海日向別邸の増築部分は、まったく人に『見せるため』のものであり、夏になっても実際にここへ住むわけではない。同氏は上多賀海岸に土地を持っており、別に買入れた古い農家をそこへ移築させているのであ

る。

#### 日向別邸地下室建築の謝礼について

・日向氏は、私に『濫い』建築を望んでいる、だがこの『濫い』は、同時にまた『廉い』に通じているのだ。吉田（鐵郎）氏や、若い建築家の本間（汎）氏、大工の佐々木（嘉平）氏も、私と同じように忍耐の試煉を受けねばなるまい。日向氏は、吉田氏達への謝禮についてひとつも考えていないのである。

**7月13日（土）** 少林山・洗心亭－東京－大倉和親氏－『ミテラス』－一の宮・敬神道場のこと－吉田氏－『奴隷解放』意味

#### 暮らしていた少林山を離れる

・少林山にしばしの別れを告げる。この夏を伊豆の上多賀で過ごすことになったからだ。

#### 吉田鐵郎氏と打ち合わせ

・レストラン『アラスカ』で吉田（鐵郎）氏と、日向邸の平面圖を検討した。

**7月21日（日）** 上多賀－海邊小記

#### 夏に暮らす用の上多賀の家について

・私達の借りた上多賀の家は静かな入江に臨んでいる。日向氏もつい近くに假住居していて、夏の別荘にする爲に山中の農家をここに移築中である。

**7月26日（金）** 上多賀－海邊の生活

#### 日向氏の上多賀の移築民家について

・いま日向氏は、避暑用の別荘にする爲に農家を（これはもと山地の地主の家であった）、ここへ移築しているが、こういう趣味はとかく近來の流行らしい。

#### 日向氏について

・日向氏は、金持にしては氣持のよい人柄である、一だがとかく金持ちというのは！この人でさえ、建築家を視ることあたかも靴磨きの如くである。

**7月27日（土）** 上多賀－上棟式

#### 日向氏の上多賀の移築民家の上棟式

・日向氏の移築家屋の上棟式が行われた。

**7月31日（木）** 上多賀－箱根・強羅－蘆の湖－湖上祭－神道の儀式－上多賀

#### 日向氏とともに箱根へ

・日向氏に誘われて箱根へ行く、同氏は箱根山中の強羅にも別荘を持っているのである。

**8月7日（水）** 上多賀－七夕祭

#### 暮らしている上多賀の家のために造っている家具について

・いま多賀の大工に頼んで、椅子と重いテーブルとを松材で造らせている、もともとここに滞在している間だけの使用に供するつもりであるが、日向氏は私達が多賀を引き上げる

際には、これを自分に譲ってほしいと言っている、例の田舎家の廣間に使いたいのだそである。

**8月16日(金)** 上多賀－東京－白木屋百貨店－車中風景－上多賀

日向別邸地下室の建設費について

・日向氏は、熱海の家の増築に必要な材料の購入費を大工の佐々木さんに渡した（これは当然のことだ）。しかし日向氏は、その金額を、まず圖面について決定すべきだということを知っているのだろうか。吉田（鐵郎）氏は『日向氏のいいようにさせておきましょう』と言う。確かにそうしておけば、當座のいざこざを避けることはできるだろう。しかしまたその爲に、後で嫌なことが起こらないとも限るまい。

熱海へ歸る車窓について ・夜、熱海へ歸る列車のなかで、右方に富士の姿をまた左方に海上の月を見た。

**8月17日(土)** 上多賀－釣堀－日本の海－鼠－ソ連の愛國主義

日向別邸地下室の天井板の材料について

・日向氏は、私が熱海の増築家屋の日本間に桐の天井板を選んだら、そのすばらしい効果を認めながらも、この材料の使用をどうしても肯んじない、安物の下駄を思い出すというのである。同氏は自分でも『迷信』だと言っているが、やはり気になるらしく、吉田（鐵郎）氏に電話をかけて加勢を求めている。

佐々木嘉平氏と話す

・近頃、大工の佐々木さんと二時間ばかり『話した』。佐々木さんは英語をひとつもしゃべればいし、私は日本語をまるきり話せないといってよい。しかしすぐれた建築と同様に、圖面と鉛筆とは『國際的』なものであるから、どうやら話を通じさせることができた。佐々木さんは、氣象のよい慎重な人だ。とにかく今度の仕事を立派に仕上げる（私はそうできると信じている）ためには、少々變妙な日向老人の氣持をよく呑込んで、程よく取扱わねばならない。

**8月19日(月)** 上多賀－移築家屋の施工について－上野君の手紙

日向氏の上多賀の移築民家について

・日向氏が上多賀海岸へ移築中の家を見ていると、日本のすぐれた傳統的手工が、もうすっかり墜落してしまったという感を深くする。

**8月31日(土)** 上多賀－熱海・日向邸－上多賀

日向別邸地下室の床の間について

・熱海、日向邸の増築は、設計通りの板材が市場に無いというので、幾個所か模様替えをしなければならなかった。大工の佐々木さんは、私の設計した床の間では、どんな形の掛物にも向くというわけにはいかない、と言ったそうだ。そこで日向氏は、自分の居間の床の間について掛物の講釋を始めたが、そこへ掛けた軸ときたらどうしようもないいかものであった。私はこの人の仕事をするのが嫌になった。日向氏が口癖にしている

『澁い』とか『味』とかいうのは、實はまったく内容の空疎な言葉にすぎない。

9月6日(金) 上多賀－ヘーベル著『寶箱』－蒲松齡の『聊齋志異』

日向氏に贈った絵について

・十七世紀の中國の作家蒲松齡の『聊齋志異』は、幻想的な物語であるが、描寫は人に迫るものがある、シェールバルト的だと言ってよい。私はそのなかの一句を、日向氏に贈る繪に贊のようにして認めた、この繪は掛物向きに仕立てたもので、私としては初めての試みだ。日向氏はこの突堤へ信號燈を設備したいというので、その費用の一端としてかねがね私の繪を所望していたのである。

・そこで私は、同氏が海岸近くに移築中の田舎家を描き（しかし實際あそこにあるようないかもの化したものではない）、その下方へ同氏が服膺すべき箴言を、波に見立て英語で書込んだ。熱海の日向邸の増築はどうやらうまくいきそうである。

9月7日(土) 上多賀－伊東－上多賀

4日向氏とともに伊東へ

・日向氏といっしょに、發動機船で伊東へ舟行した。

9月8日(日) 上多賀－熱海－上多賀

日向氏の上多賀の移築民家について

・日向氏來訪。移築中の田舎家をいかもの建築だとする私の批評を眞面目に受取ったものと見え、破風を取除き屋根をもっと低くしたほうがよいという私の意見通りに模様替えしたいと言う。ところが大工のほうでは、いまさら變更は不可能だとして、聞き入れようとしな。私は自分で大工とじかに話合うのがよいと思った。やがて棟梁が圖面をもって私のところへ来た、しかし結局は私の言分を認め、必要な模様替えは今からでもできると言った。

日向別邸地下室において、日向氏が、タウトの指示に従うと約束

・なお日向氏は、熱海の家を増築については（例の天井の件も）、すべて私の指示通りにするとはっきり約束した。

送別會（夏に暮らした上多賀の家から引きあげるため）

・夕方熱海へ行く（上多賀へ来てからこれで八回目である）、日向氏が自邸で私達の送別會を催してくれたのである。

9月9日(月) 上多賀－富士山－東京

夏に暮らした上多賀の家を引きあげる

・上多賀を引上げる日である、この暑さにまたしても引越しの荷造りだ。

9月14日(土) 少林山・洗心亭－身邊雜記

日向夫人から藁座をもらい、金錢問題は触れないと決心

・日向夫人が、見事な藁座を送ってくれた、この上に寝るのは、蒲團の上に寝るよりもずっと氣持ちよい。私はこれからも日向氏と友好を保ち、金錢の問題には一切觸れない

ことにした。

**11月17日（日）東京－熱海－東京**

日向別邸地下室の増築現場へ行く（鈴木道次と同行）

・熱海へ日向邸の増築現場を見に行く、通譯として鈴木道次氏に同行してもらった。この熱海行もやはり私の負擔である、まだ建築主から一錢も受取っていないのだ。私がいつか日向氏に贈った繪は、絹地に表装されて座敷の床の間に掛けてあった。

日向別邸地下室の完成後を想像して期待がふくらむ

・日向氏は、建築現場（庭園の眞下で、一部は屋根の下にもなっている地下である）へは一度も降りてこない、建築に関しては、すべて私が決定することになっているのである。工事の進捗は頗る緩慢だが、仕事は非常に眞面目で、まず上乘の出来栄である。日本間の部分の用材は、色の調子が品よく落ちついている、また私が此處で製圖したモダンな洋間のほうも、見事な釣合をもつようになるだろう。全體として、特に際立たせた個所はひとつもなくすべて優雅な趣味の人に向くような建築である。

**12月8日（日）東京－熱海－小堀遠州のこと－東京**

日向別邸地下室の現場へ行く（吉田鐵郎と同行）

・吉田（鐵郎）氏と熱海の建築現場（日向邸）を見に行く、進行は相變らず緩慢だが、仕事からは氣持のよい印象を受けた。吉田氏も建築の質のすぐれていることを確認してくれたので大變心強かった。



## 1936年（昭和11年）

2月17日（月）京都－熱海－東京

日向別邸地下室の現場へ行く（上野伊三郎と同行）

・熱海で途中下車し、日向邸の増築現場で二時間過ごす。邸前の梅が満開であった。

4月12日（日）上多賀－上野伊三郎氏－熱海－日向邸の増築工事

日向別邸地下室の現場へ行く（上野伊三郎と同行）

・上野君が、群馬縣工藝所長として高崎へ赴任する途中、ここへ立寄ってくれた。

日向別邸地下室の現場で、色彩や用材の処理などのやり直す点を見つける

・上野君といっしょに熱海へ行き、日向邸の建築現場を見る。色彩や用材の処理について遺憾な点もいくつかあり、その爲に高雅な趣味がそこなわれる個所は是非ともやり直さねばならないが、しかしこうして見ると、世界的な好趣味というものは、時に媚びる日本主義よりも遙かに重厚であることがよく判る。

9月20日 東京－熱海・日向邸－ベルリンのオリンピック競技場について－マルヒのこと

日向別邸地下室の新築披露に行く

・吉田、水原、島田、高村、ブブノワ夫妻、山野の諸氏と連立って、私が増築した日向邸を見に熱海へ行った。

地下室の出来に満足する

・私も、一應完成したと言えるこの建築と内部の照明や主要な家具などを、自分の眼で見るのは今度が初めてなので、実際にはどんなものかと、自分でも好奇心をもち、また少なからず興奮もしたが、今私の仕事が、細部にいたるまで成功しているのを見て、非常に満足した。

・もちろん、不手際と思われる些細な個所や、また必ずしも適切とは言えない間接照明などは、満足のうちに入らない。しかし全體として明快嚴密で、ピンポン室（或は舞踏室）、洋風なモダンな居間、日本座敷及び日本風のヴェランダを、一列に並べた配置は、すぐれた諧調を示している。いささか古めかしい言い方をすれば、ベートーヴェン、モーツァルト、バッハだ。私はこの建築を、釣合についてはもとより、細部、材料及び色彩にいたるまで、成功したと信じている。

・私はこの建築を、釣合についてはもとより、細部、材料及び色彩にいたるまで、成功したと信じている。

地下室とその写真撮影について

・寫眞でこれを再現することは不可能である、元來寫眞に撮影するための建築では無いからだ。

日向別邸地下室の日本間について

・一年半前に日向氏から建築を依頼された時には、まだ日本間についてやや危惧の念を

懐いていた。

桂離宮と小堀遠州・私はいつも日本人達に、桂離宮と小堀遠州とを建築及び建築家の模範として示してきた（日本人は、のちに私の見解を正しいと認めるだろうか）

#### 吉田鐵郎氏について

・当時私には、日本の古典建築の特殊な細部に關する研究が十分でなかった。これについて、私は吉田（鐵郎）氏に教えられるところが多大であった。兩人は相共に研究を進め、不明な諸點を審かにした、だが吉田氏は一切の決定を私に任せた。

#### 日向別邸地下室に対する、水原氏のコメントについて

・水原氏は、『こういう建築は、日本の何處にもありません』と言ったが、私もまったくその通りだと思う。確かに、日本に未だ會つてなかつた『新しいもの』だ、だが日本の古典建築を範としたのは釣合だけである（もちろんこれは決して些々たることではない）、ほかには一物と雖も模倣はない。すべて單純を旨とし、金具類にしてもわざわざ工業建築用の雛型から選び、従ってロマンティックな趣はひとつもない。

#### 日向別邸地下室の仕上げについて

・随分厄介な仕事もした、例えば檜材には染料を塗って自然の色調（緑かかった灰色）を如實に出そうとした（これは三回やり直した）。

#### 実際に社交室（舞踏室）で踊り、空間を試す

・私は、第一の部屋（舞踏室）でブブノワ女史を相手にワルツを踊った。それから第二の部屋（洋風居間）でお茶の會をし、この二つの部屋がそれぞれ氣分を換え、また異なった社交的雰圍氣を醸し出すかどうかを試してみた。洋風居間にはモダン化した床の間があり、繪畫をガラス戸の中に列べるように仕立てたものであるが、生憎まだ繪畫が用意していなかったので、ブブノワ女史と水原氏とが、即席で何か『エッチング』風のものを描いてくれた。